

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2003年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院		文学研究科	組織神学 専攻
指導教員	所属・職名		氏名	
	文学部 教授	名取 四郎		印
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/>	個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 共同	1名
研究課題	ジローナ・ベアトゥス写本の挿絵研究			
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
	文学研究科組織神学専攻4年	宮内 ふじ乃		印
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
研究期間	2003 年度			
研究経費	200 千円			

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

スペイン北部アストゥリアス地方リエバナの修道士ベアトゥスによって、776年頃に編纂された『ヨハネの黙示録註解』は、中世を通じてスペイン北部各地の修道院で盛んに制作された。ベアトゥス写本と総称されるこの写本群は、挿絵入りのものが断簡を含めて26冊現存している。中でも975年に制作され、現在カタルーニャ地方のジローナ大聖堂に所蔵されているベアトゥス写本（Inv.7(11)、以下《ジローナ本》）は、ベアトゥスの黙示録註解に先立って多くの挿絵が導入された極めて特異な編成からなる一冊である。本研究では、《ジローナ本》の挿絵研究の一環として、本写本において、一体何故このような大規模な導入部を必要とするに至ったのか、その経緯や意図、及び構想を明らかにし、その全体像を浮き彫りにすることを目指した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[中世美術] [ベアトゥス写本] [写本挿絵]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

このような新たな編成が生まれる端緒として挙げられるのは、《ジローナ本》に先行する《モーガン本》において、写本の冒頭に「福音書記者像」と「キリストの系図」とが加えられたことである。そこで、先ず《モーガン本》において付加された2つの主題である「福音書記者像」と「キリストの系図」の考察を行なった。本来福音書の冒頭を飾るにふさわしい主題をベアトゥス写本の巻頭に導入するに至った経緯が、福音書的な価値をベアトゥス写本に付与しようとする試みであることは、すでに先行研究で論じられている。こうした諸先学の成果を基にしながら、先ず、「福音書記者像」と「福音書記者の象徴と2天使」の図像伝播を個別に整理し、登場人物の確定すらできない曖昧な表現に至らしめた経緯を具体的に示した。次に、「福音書記者像」(左ページ)と「福音書記者の象徴と2天使」(右ページ)の2挿絵1対という特異な形式に焦点を絞って考察を試みた結果、左右のページにはベアトゥスの教会論に見る地上的、天上的な教会のシンボリズムが表されていることが明らかとなった。さらに、ベアトゥス写本に導入された「福音書記者像」は、著者の肖像を描くことを目的としているのではなく、黙示録の発想に呼応する天使を仲介者とした伝達にあることを指摘した。

続く、「キリストの系図」は、アダムとイブに始まり、キリストに至る全歴史が、聖書や福音書の記述だけでなく、年代記や歴史書を使って網羅されている。重要な父祖の系図の冒頭に描かれた物語の場面選択は、現存するベアトゥス写本においてほとんど変化はない。一方、「キリストの系図」の最後に描かれた受肉に関わる挿絵では、「マギの礼拝」や「聖母子」といったように、写本によって比較的自由に場面が選択されている。とはいえ《ジローナ本》以外の写本では、「系図」の中に受肉を位置づけようとする意図がみえる。他方、《ジローナ本》では「受胎告知」と「降誕」に独立した絵画空間が与えられ、この2挿絵を「系図」の締めくくりであると同時に、続く「キリスト伝」の始まりに位置付けられている。

こうしてベアトゥス写本の巻頭編成改変の考察を経た上で、《ジローナ本》の冒頭を飾る「十字架」と新たに導入された「マイエスタス・ドミニ」の図像学的分析を行った。《ジローナ本》以前から、「十字架」は、レコンキスタの勝利のシンボルとして、黙示録に限らず、様々な種類の写本の冒頭を飾っていた。ところが、《ジローナ本》では、先行作例にもない海綿と槍、それらを支え持つ仔羊、そして十字架を仰ぐ2福音書記者の象徴という3要素が付加され、背景も夜空に改変された。新たに生まれ変わった《ジローナ本》の「十字架」は、レコンキスタの勝利のシンボルであり、かつ護符としての十字架といった本来の意味にとどまらず、受難具によって暗示された十字架上でのキリストの勝利、そして屠られた後復活して新しい生命を持った勝利の仔羊という3重の勝利の象徴となる。

「十字架」の対向ページに置かれた「マイエスタス・ドミニ」に関しては、今日まで、「キリスト伝」とともに、福音書関心によって巻頭に付加されたという側面がもっぱら強調されてきた。というのも、本「マイエスタス・ドミニ」は、カロリング朝トゥール派の福音書の扉絵に酷似しており、《ジローナ本》がカロリング朝の一卷本聖書あるいは福音書になぞらえた写本構成を目指したと考えられるからである。トゥール派の「マイエスタス・ドミニ」は、神学的な意味をもつ様々な図形や図像の組み合わせによって、4福音書の和合を表す構想のもとで生まれた。一方、《ジローナ本》では、その意味深い複雑な図形の組み合わせは、栄光に包まれた神の顕現を強調する光彩の多層構造となっている。そして最も重要なこととして挙げられるのは、《ジローナ本》の「マイエスタス・ドミニ」が、トゥール派の同図に描かれることのなかった靈魂とその上昇に関与する天使とを描くことによって、救い主としてのキリストが強調されている点である。続く「天図」が、その多様な図像によって、この救いと救い主の全貌を明らかにする。「天図」は、高位の天使に導かれて天に引き上げられた靈魂が、徳の道を香炉の煙と共に有翼の獅子(天使の軍団)に守られて、7つの天を上昇していく靈魂の神への帰還を図解したものである。この上昇と救済のシステムを構成している図像要素は、《ジローナ本》の巻頭に付加された挿絵の中にちりばめられており、これを先ず《ジローナ本》巻頭挿絵の装飾システムの一つ

として捉えた。そして、この靈魂の上昇に関する思弁的な内容は、徳行修行と観想の祈りを神探求のあらわれとする大グレゴリウスの教説に基づいていることを指摘した。そして、建徳と靈魂の上昇といったテーマは、「キリスト伝」の最後を飾る「冥府降下」と「義人の悦び」にパラフレーズされていることも明らかにした。

さらに傷みが激しくはっきりと見えないキリストの姿を詳細に観察した結果、武装した姿であることがわかった。《ジローナ本》の制作地と考えられているタバラ修道院は、対イスラム教徒の紛争が苛烈だったドウエロ川流域に位置しており、軍事政策への関心を示しかつ勝利を願っていた。こうした状況が、「天図」においてキリストを武装せしめたと考えられる。こうしてみると、福音書の主題に先立って新たに導入された「天図」の中央に武装するキリストを君臨させ、その締めくくりを飾る位置に受肉と勝利のアレゴリーである「鳥と蛇」を置いた巻頭挿絵の構成にはイスラム教徒との戦いに勝つことを願い、教会の勝利を祈念する意図がみえる。

続く「キリスト伝」は、「受胎告知」に始まり、「マギの礼拝」と「ヘロデ大王の逸話の小サイクル」、「カイアファの前のキリスト」と「ペテロの否認」、「磔刑」、「埋葬」と「キリストの出現」、「冥府降下」と「義人の悦び」で構成されている。筆者はさらに《ジローナ本》の忠実な写しである《トリノ本》受難伝が、《ジローナ本》の fols.15v と 16 の間にあったと想定した。その根拠として、①双方の写本に共通する図像と画中詞との食い違い、②《ジローナ本》の巻頭挿絵の装飾システムからのみ説明可能な特殊な図像の存在、③共通する画面形式、という3点を挙げた。さらに、善と悪との対比による勝利の強調という《ジローナ本》の画面構成の原則に従って、もう一つの主題である「エルサレム入城」が「ヘロデ大王の落馬」と対置されていたのではないかという仮説を提示した。こうした手続きを経て、落葉箇所を想定した「キリスト伝」全体の再構成を試みた。

こうして再構成した「キリスト伝」挿絵群について、①主題の選択の意図と配置の基準、②「キリスト伝」導入の経緯、③「キリスト伝」と黙示録註解書本体の挿絵との有機的な関係、について考察した。その結果、《ジローナ本》の「キリスト伝」を中心とした装飾システムは、次の2点に要約される。

1) 註解的システム。「磔刑」と「埋葬」に描かれたアダムとキリストのタイポロジカルな関係がベアトゥスの註解に見出されるだけでなく、キリストの墓の描写もまたベアトゥスの註解の中最も重要な教会論の反映が認められる。さらに、「冥府降下」と「義人の悦び」に示された「最後の審判」の死者のカテゴリー分類の仕方も、ベアトゥスの註解に従っている。こうして明らかとなった註解内容の積極的な画像化という装飾システムは、ベアトゥス写本の巻頭にふさわしい「キリスト伝」を目指したからに他ならない。

2) 典礼的システム。再構成した「キリスト伝」を福音書本文に照らし合わせた上で厳密に吟味すると、これら一連の挿絵は、いわゆるモサラベ式典礼における降誕祭から復活祭までの重要な祭日に対応しており、ページごとに主題がまとめられている。そして何より重要な点は、この典礼暦に並行するシステムに基づく「キリスト伝」の導入が、復活祭から聖霊降臨祭までの期間、モサラベ式典礼で朗読されていた黙示録本文に対応する註解書本体の挿絵に次のような変化をもたらしたことである。まず、典礼における黙示録朗読箇所と対応する主題のほとんどが、《ジローナ本》において拡大されていること。次に、これら挿絵はいずれも、既存のイメージを繰り返す他の挿絵よりもその独創性と入念で明解な図式が際立っていること。さらに、いくつかの挿絵では、典礼を示唆する図像要素によって教会堂内部の荘厳化が試みられ、また見る者に緊張と感動を与えるイメージによって組み立てられていること、である。加えて、《ジローナ本》に註解書本体の余白挿絵として新たに導入された「キリストの洗礼」と「蛇と騎士」という2つの主題もまた、典礼暦と並行する「キリスト伝」の導入が契機となっていることも確認された。こうした一連の事実は、《ジローナ本》が公的な場において見せることを意図して制作されたからに他ならず、典礼書になぞらえられた《ジローナ本》という新たな視点からの作品解釈が可能であることを示した。

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

②図書 (著者名、出版者、書名、発行年、総ページ数)

③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- 1999年11月 「ジローナ大聖堂所蔵ベアトゥス写本の天上のヴィジョン」 (上智大学にて開催されたスペイン・ラテンアメリカ美術史研究会にて発表)
- 2000年3月 『ジローナ大聖堂蔵ベアトゥス黙示録註解書写本の「天」図 (fols.3v-4r)の研究』修士論文 (金沢美術工芸大学大学院に提出)
- 2000年5月 「ジローナ大聖堂所蔵ベアトゥス写本の「天」図に見るキリスト-皇帝像をめぐって」 (筑波大学にて開催された第53回美術史学会全国大会にて発表)
- 2000年12月 「ジローナ・ベアトゥス写本の「冥府降下」と「義人たちの悦び」(fols.17v-18)」 『学報』第7号 54-70頁 (金沢芸術学研究会発行)
- 2000年12月 「ジローナ・ベアトゥス写本の巻頭挿絵研究-「十字架」(fol.1v)の図像改変をめぐって-」 『DEREK』第20号 54-72頁 (立教大学文学研究科組織神学専攻発行)
- 2001年4月 「ジローナ・ベアトゥス写本の「天図」(fols.3v-4)をめぐって」 『スペイン・ラテンアメリカ美術史研究』第2号 1-8頁 (スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会発行)
- 2001年12月 「ジローナ・ベアトゥス写本の巻頭挿絵研究(Ⅱ)-「マエスタス・ドミニ」-」 『DEREK』第21号 68-85頁 (立教大学文学研究科組織神学専攻発行)
- 2002年3月 「福音書記者図像研究の変遷」 『館報』第11号 19-28頁 (富山市箕牛人記念美術館発行)
- 2003年1月 「ジローナ・ベアトゥス写本の『キリスト伝』」 (立教大学で開催された第1回新約聖書図像研究会(NTIS)にて発表)
- 2003年5月 「ジローナ・ベアトゥス写本の「キリスト伝」プログラム」(関西学院大学で開催された第56回美術史学会全国大会にて発表)
- 2003年11月 「ジローナ・ベアトゥス写本の巻頭挿絵研究」 『鹿島美術研究』年報20号別冊 118-127頁 (鹿島美術財団発行)
- 2004年11月 『ジローナ大聖堂所蔵ベアトゥス黙示録註解書写本の巻頭挿絵研究』課程博士学位申請論文提出
- 2004年10月 「ジローナ・ベアトゥス写本の「キリスト伝」プログラム」、『美術史』157号掲載予定